

イントラムロス出土陶磁器調査報告（概要）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野上, 建紀, Orogo, Alfredo B., Cuevas, Nida T., 田中, 和彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2981

金大考古 51, November 2005, 5-9. イントラムロス出土陶磁器調査報告（概要）：野上建紀・Alfredo B.Orogo・Nida T.Cuevas・田中和彦

イントラムロス出土陶磁器調査報告（概要） Report of the Research About Ceramics Found at Intramuros, Manila : Abstract

野上 建紀 Alfredo B. Orogo
Nida T.Cuevas 田中 和彦

1 はじめに

2005年1月22日～29日の日程でフィリピン国立博物館において、イントラムロス遺跡内で出土した陶磁器の調査を行った。

調査はフィリピン国立博物館考古部長の Wilfredo P. Ronquillo 教授の協力と助言を得ながら、野上建紀、Nida T. Cuevas、Alfredo B. Orogo、田中和彦が行った。

今回の調査は、2004年3月にフィリピン近海の沈没船に伴う陶磁器調査を行った際、イントラムロス出土陶磁器の中に有田焼をはじめとした肥前磁器を発見したことにより始まったものである（野上・Orogo・田中・洪 2005）。その後、2005年1月より3年間、フィ

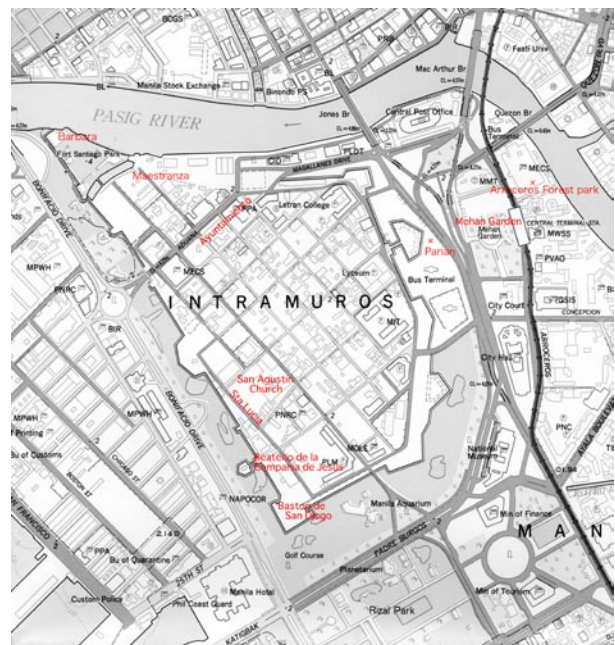


Figure.1 Map of Intramuros, Manila

リピン国立博物館と共同研究を行うこととなり、今回の調査は共同研究の覚書締結後の最初の調査となる。イントラムロスをはじめとしたマニラ市内遺跡における日本磁器の出土状況を知ることが主たる調査目的で

あるが、マニラにおける日本磁器の位置づけを知るためにはイントラムロス全体の陶磁器の出土状況を知る必要がある。そのため、日本磁器だけでなく、中国陶磁、東南アジア産陶器、在地土器も含めて、イントラムロス遺跡出土の陶磁器を総合的に調査し、その特質を明らかにすることも目的としている。

2 調査内容

これまでイントラムロス地区内 (Figure.1) で発掘調査された例は少なくなく、その遺物の管理状態も比較的良好である。今回はイントラムロスの遺跡の中でも北側に位置するアユンタミエント (Ayuntamiento) 遺跡出土遺物を中心に調査を行った。

出土陶磁器をまず土器と陶磁器に大別し、さらに陶磁器を大壺類とそれ以外に分けた。遺物が収納されている袋に通し番号を付け、袋ごとに陶磁器の産地別、年代別に分類していった。陶磁器の産地については、

景德镇系、福建・広東系、日本磁器 (肥前磁器)、東南アジア産陶器、ヨーロッパ系陶磁器、その他に分類した。年代については、I期 (1571年以前)、II期 (16世紀末～17世紀前半を中心とする)、III期 (17世紀後半を中心とする)、IV期 (17世紀末～18世紀を中心とする)、V期 (18世紀後半～19世紀を中心とする) に分類した。

3 出土陶磁器の概要

アユンタミエント遺跡を中心にイントラムロス地区から出土した陶磁器の概要を次に述べたいと思う。

(1) 製品組成

まず、陶磁器 (大壺類を除く) の産地については、中国磁器 (Figures.2～7) が全体の90%以上を占める。次いでヨーロッパ系陶磁器が約7%を占める。日本磁器 (肥前磁器) は1%程度を占めるに過ぎない。



Figure.2 Chinese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.3 Chinese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.4 Chinese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines

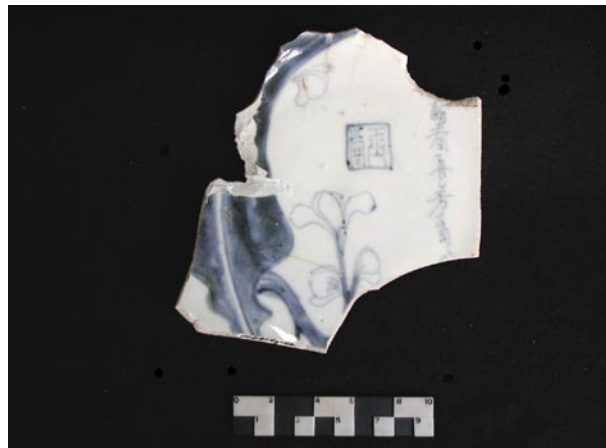


Figure.5 Chinese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.6 Chinese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.8 Vietnamese ceramic at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.7 Chinese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.9 European ceramic at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines

東南アジア産陶器はベトナム産染付皿が出土している (Figure.8)。

次に最も多い中国磁器を年代別に見ると、I・II期に該当する製品が90%以上を占めるが、そのほとんどはII期に該当するものであり (Figures.2～3)、確実にI期に該当すると思われるものは少ない。すなわち、スペインによる1571年のマニラ建設以降の製品がほとんどである。そして、III・IV期 (Figures.5・6) が約7%、V期 (Figure.7) が約2～3%である。V期の製品が最も少ないが、大壺類を除いた陶磁器全体の約7%を占めるヨーロッパ系陶磁器 (Figure.9) の大半はV期のものであるため、陶磁器全体ではIII・IV期の遺物が最も少ない。

ただし、この傾向がイントラムロス全体の遺跡にあてはまるかどうかはわからない。今回は調査対象と

しなかったが、同じくイントラムロス内に位置する Beaterio De la Compania de Jesus 遺跡では、18世紀以降の中国磁器が数多く見られる。調査地点によって出土状況が異なる可能性がある。

(2) イントラムロス出土の日本磁器

今回の調査で新たに少なくとも19点の日本磁器 (肥前磁器) を確認した。2004年3月に確認したものと合わせると、24点を数える。

確認された日本磁器は、アユンタミエント遺跡の各種の染付芙蓉手皿、染付碗など16点、Beaterio De la Compania de Jesus 遺跡の粗製の染付芙蓉手皿、染付手付鉢 (便器) など3点である。これらの多くは17世紀後半のものであるが、18世紀初にまで生産年代がさがる可能性をもつものも含まれる。2004年3月に

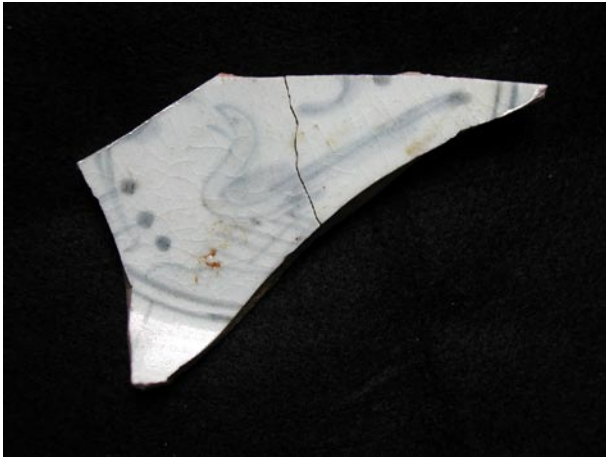


Figure.10 Japanese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.11 Japanese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines

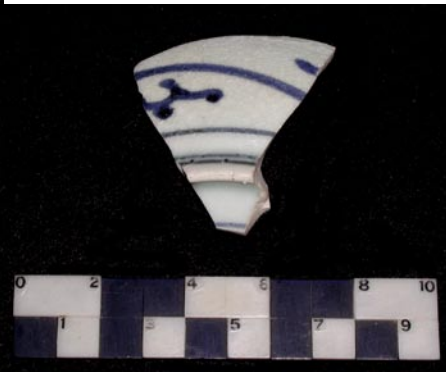
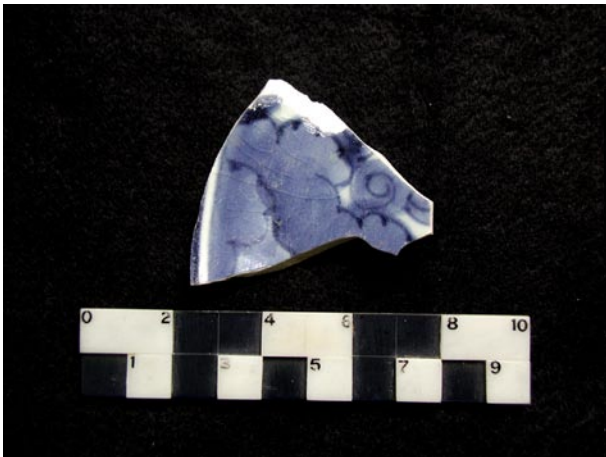


Figure.12 Japanese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines



Figure.13 Japanese porcelain at Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines

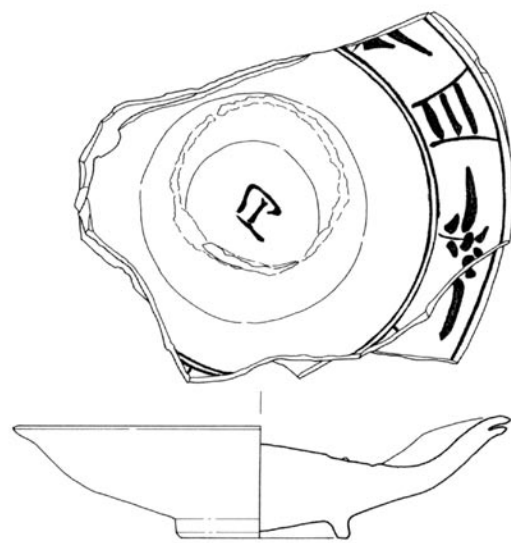


Figure.14 Hasami porcelain at Nakao-Uwanobori
kiln site 中尾上登窯跡, Hasami

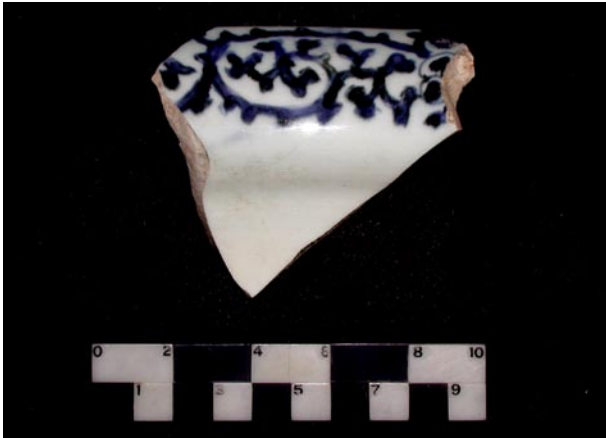


Figure.15 Japanese porcelain in Intramuros
Courtesy : National Museum of the Philippines

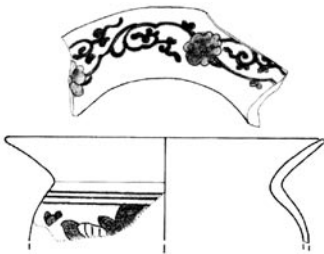


Figure.16 Arita porcelain at Shimoshirakawa kiln site 下白川窯跡, Arita

確認した日本磁器は5点の内、4点が有田内山の窯場で生産されたものと考えられ、比較的上質の製品が多かったが、今回は粗製の製品も多く見られた。例えば見込みに「日」字を書いた粗製の芙蓉手皿 (Figure.13) などは長崎県の波佐見地区の中尾上登窯などで出土が確認されているものである (Figure.14)。また、2004年3月の調査で確認されたものは皿のみであったが、今回は碗、手付鉢 (Figure.15) なども確認することができた。

4 今後の課題

出土陶磁器の概要でも述べたように同じイントラムロス内であっても調査地点によって、出土陶磁器の製品組成は大きく異なる可能性がある。イントラムロス内の各遺跡の出土状況を比較しながら、イントラムロス全体の出土陶磁器の傾向を知ることが必要である。

また、マニラ首都圏で発掘調査が行われているのは、イントラムロス内だけではない。例えば1671年のマニラ古地図に中国人町として描かれている地区 (現在の Mehan Garden メハン・ガーデン) の発掘調査も

行われている。詳しく観察したわけではないが、アユンタミエント遺跡に比べると18～19世紀の遺物が多く、景德鎮系の磁器、特にカラック磁器など輸出用磁器が少ない印象を受けた。イントラムロスの城壁の内側と外側の遺跡の比較も必要な作業であろうと思う。さらに将来的にはフィリピン国内の遺跡間の比較や東南アジア地域内の遺跡間の比較も必要となろう。

そして、フィリピンにおける出土陶磁器の傾向と特質を明らかにする一方で、それらの陶磁器の入手経路や輸出先についても調べる必要がある。それらの入手経路については、中国や台湾などの出土状況が重要となるであろうし、輸出先についてはスペインのガレオン船沈没船資料、アメリカ西海岸やメキシコなどアメリカ大陸のスペイン植民地における出土状況を調べる作業が必要となる。

今後、調査を3年計画で行う予定であるが、この期間だけで上記の課題の全てを解決できるものではない。この3年間はこれらの課題を念頭に置いた基礎資料収集にあてたいと考えている。

本調査及び研究は、平成15年度(2003)及び平成16年度(2004)西田記念東洋陶磁史研究助成、平成17年度(2005)高梨学術奨励基金の助成を受けて行った。

関連文献

- 野上建紀・Alfredo B.Orogo・田中和彦・洪曉純 2005
「マニラ出土の肥前磁器」『金大考古』No.48
野上建紀・李匡悌・盧泰康・洪曉純 2005
「台南出土の肥前磁器」『金大考古』No.48
野上建紀 2005
「澳門出土の肥前磁器」『金大考古』No.50
野上建紀・Alfredo B.Orogo・Nida T.Cuevas・田中和彦・洪曉純 2005
「ガレオン船で運ばれた肥前磁器」
『水中考古学研究』創刊号
盧泰康 2005
「麻六甲の肥前磁器貿易」『金大考古』No.50